

# 佐伯史談

第六十三号

「辯史研究」誌  
通算第八十五号

昭和四十九年四月廿五日

## 佐伯史談会

事務局 佐伯市大字稻垣字龍護寺 羽柴才

上張

### 古蹟を大切に保存しよう

文化財の盗難や破壊をなくす

賛助会員 高橋 賢

大正の始め頃日豊線が開通したときのこと、当時日本でも多数の土建会社で、名は何と云う会社であったか忘れたが、この会社が鉄道建設の工事を請負い、県下でも大分の梅林組等がその下請としていた頃の話である。

この土建会社の社長がものすごく古美術愛者家であつて、日豊沿線にある五輪塔や石佛等を買い集めて、東京に持って帰り、本宅や別邸等に配置して眺めることと趣味としていた。これを知つた古物商等がこの社長に、石佛や石塔を高価に売りつけ左で取らうことと想像はかたくない。おそろしく、今も昔もがわりなく、因東半高やその他のかかる文化財も、その当時から持ち出されたものと思われるが、そのうちこの富豪の会社社長もうちば、色々な災害が訪れて不幸が続くので、ある祈禱師に、自分もうちばどうも不幸がまゝくはどようしなまらうハ、

なにかよい方法はないだろうかと思つて、かゝ頼んでみてもらつたところ、その祈禱師の云うには、おななは大変な祟りをつけている、何の祟りかと、石塔や石佛を沢山買ひ集めて持っているが、これが常に祟りをなしている。この災いと除くには、それを元取つたところを全部返してしまいなさい、それでなければ、おなな自身の命にもかかわり、尚祟りがひどくなつて不幸が更に続くので、おななと云おれでびつくり、それはよいことと赦さてくれた。それは元取つたところを返したいが、自分は沢山の人から買ひ集めたので、元のとこゝに返さうにも返す方法がないという、その祈禱師が云うには、左つ友一ついい方法がある、それは大宰府の何とが云うところの土地を買つて、おななと云おれ

### 本号内容

- 主張 古蹟を大切に保存しよう (伊賀重雄)
- 研究 古蹟所の古塔の謎 (岩田善吉)
- ・ 佐伯の歴史を語る (古藤田太)
- ・ 南北朝の争乱と佐伯地方
- ・ 佐伯尋常高等小学校的沿革 (山内武勝)
- ・ 大正年間 (山内武勝)
- ・ 佐伯の港はとてな働きをしてゐるか (三佐伯隆)
- ・ 佐伯港 (市野依仁)
- ・ 御年賣の上級 (羽柴才)
- ・ 赤木村大庄屋文書の周辺 (三佐伯隆)
- ・ 佐伯と園木町歩 (山内保)
- ・ 佐伯の歴史 (佐伯隆)
- ・ 見聞大野川流域の石造文化財 (伊賀重雄)
- ・ 薩摩春嶽の日の城山 (狩土秋仙)
- ・ 報安徳川秘宝辰見落し雲山 (山内保)
- ・ 外 標榜記、報告など

塔や石佛をもつていつて、そこで祭りなさい。そうすると災いが無くなるであらう——とのことには、それではその云う通りにして、やつと不仕合せから脱れることが出来たという。

これはもう故人の、佐伯の古物商で郷土史家でもあった柴田南華翁から聞いた話である。今時石佛が崇るなど云うことは一見つくり話のようで、どこまで本当であるか疑わしいと思う人もあると思うが、必ずしもそうではない。

終戦直後の昭和二十一年に刀剣の供出があり、それがふんや占領軍によって没收された時、米軍のある将校が一振りの日本刀を持って本国に帰ったところ、その日本刀が崇りをなして気味があるくなり、外務省を通じて日本に返還されたのでその刀を調べたと云ふ、その刀は宇佐神宮の宝刀であつた由。へそは左しか、左文字ではなかつたかと思う。そういうことを思ひあわせると、先般大分市の椋原八幡宮の宝刀が何者かの盗難に罹り、しばらくして別府市山の手のある家の軒下に立てかけてあつたのが発見されたことは耳新しいが、盗つた者は良心の呵責と、神罰をおそれて、これを金にかえることもかくして持つていくことも出来なかつたのではあるまいか。

私は村の文化財調査委員をしているので、よく県主催の文化財関係の講習会に行く機会があるが、講師の大学の先生方が、古墳の発掘調査等に行つて、思ひぬけがせしたり、災いにあつたりして崇りを受けることを、実例をあげて話していただきを聴いて、確かにそんなことがあり得るものと思う。

私達の遠い祖先の人達によつて築かれた石佛にせよ塔

にせよ、これ等のものはいづれも故人の霊を慰める供養塔か、又は信仰上のためのものであり、それがその土地にあるべきところにあつてこそ、はじめた歴史的な価値があり、文化と密接な関係があり、文化財として貴重なものであるはずである。当然これ等の文化遺産は敬虔の念をもつて大切に保存し、後世に伝うべきものである。

個人々々の古美術趣味によつてやたらに持ち去つたり、金に換ふからと云つてこれを盗んで売らうとするものは、罰か仏罰か知らないが、恐ろしい崇りがあり、災いや不幸がやつてくること、とき面であらう。

研究

市福所の古塔の謎

戦死した夜久実守の位牌の文字から——

会員 岩田善市

或る日、下野田の月、足田泉先生と訪問された遠来の客があらました。この人は京都府天田郡中夜久村の西垣藤松氏で、はるばる遠国佐伯に歩を運び、自家に伝わる先祖の位牌に書かれた文章の謎をとき、實地に見聞して先祖の霊を弔いたいと、郷土史家足田先生の宅を訪れたいと。その時西垣氏が持参した二つの位牌について、先生が写しとつておりました。左の位牌について、私がお聞きしたつたのが次の通りで、勿論今は故人である足田先生御健在の、今から十年位前のことであらう。